

# Encourage & Company

皆さんこんにちは。  
エンカレッジアンドカンパニーの堀です。

私のコラムでは、中国の故事成語について、我々の日常に何か応用できないか、という観点でシリーズとして書き綴っています。

第1回目は「牛耳る」という言葉についてお話ししました。

第2回目は「鳴かず飛ばず」。

第3回目は「司馬懿仲達」について。

第4回目は「我れ鳥獣にあらず」。

第5回目は「国士無双」「狡兎死して走狗煮らる」。

今回第6回目は、楽しいお話をしようと思います。

日本人で歴史上名前が残る最古の人は帥升（すいしょう）という王です。  
だいたい紀元後100年ぐらいで、その次あたりに卑弥呼が登場します。  
しかし、天皇の歴史の最古の人は神武天皇であり、紀元前600年ぐらいです。  
これは天皇家に正当性を付与する為の神話であり、これがそのまま史実であるとは考えられていません。

中国も同じことです。歴史上存在が確認されている最古の王朝は紀元前2,000年ぐらいの夏です。しかし夏よりも昔に三皇五帝という時代があります。この時代については神話であるとされ存在が確認されていません。もし史実であれば紀元前4,000年ぐらいの出来事です。

五帝のうち一人、堯帝(ぎょうてい)の故事が私の胸を打ってなりません。  
その故事は自分が影響を及ぼした世界が、自分を含めどう評価されるのか、一つのモノサシを与えてくれます。

堯帝の治世は数十年平和に続きました。  
しかし堯帝はあまりの平和さに、天下が本当に治まっているのか、自分が帝であることに民は満足しているのか、かえって不安になりました。  
堯帝は目立たぬように変装して世間の様子を自分の目と耳で確かめようとしていました。  
とおりがりの子供たちが、堯帝を賛美する歌を歌っていました。  
これを聴いた堯帝は、子供たちは大人に歌わされているのではないかと疑い真に受けませんでした。

# Encourage & Company

そのそばで老百姓が腹を叩き、地を踏み鳴らしながら楽しげに歌っているのを聴きました。

日の出と共に働きに出て、  
日の入と共に休みに帰る。  
水を飲みたければ井戸を掘って飲み、  
飯を食いたければ田畑を耕して食う。  
帝の力がどうして私に関わりがあるというのだろうか。

この歌を聴いて堯帝は世の中が平和に治まっていることをはじめて悟りました。

つまり誰が帝であろうと自分の人生に影響がないと老百姓が思えるぐらいに、堯帝がデザインした世界は空気のように当たり前に人々に受け容れられ、更に揺るぎのないものだったんですね。

後世の実在する皇帝たちはこの堯帝の故事を一つのモノサシとして国造りに励みました。

みなさんも経営者であったり、管理する立場であったり、人が集まる時にまとめる役をやったりすることが日常的にあると思います。堯帝の治世を一つ目標としてみてはいかがでしょうか。

誰がトップやっても関係ない、だって生きてることが楽しいもん、とおじいちゃんが楽しげに歌ってる。そんな、ほのぼのとした世界に近づけますね。

<以下はコメント頂いた方とのやりとりです>

Sさん、大概があの人リーダーじゃなかったら上手くいかなかったという話になりそうですね。更にそのあの人もそう言われると悪い気しなくて悦に入ります。しかしそのリーダーはまだまだと、堯帝の故事は示唆を与えてくれます。

誰がリーダーをやっても上手くいく組織をデザインできたかどうかの方がより重要という示唆です。そこから、二代目で上手くいなくなる会社は、初代が誰が社長をやっても上手くいく組織をデザインできなかったという考え方もできますね。

堀 洋三